

# 「ひょうたん温泉」始末記

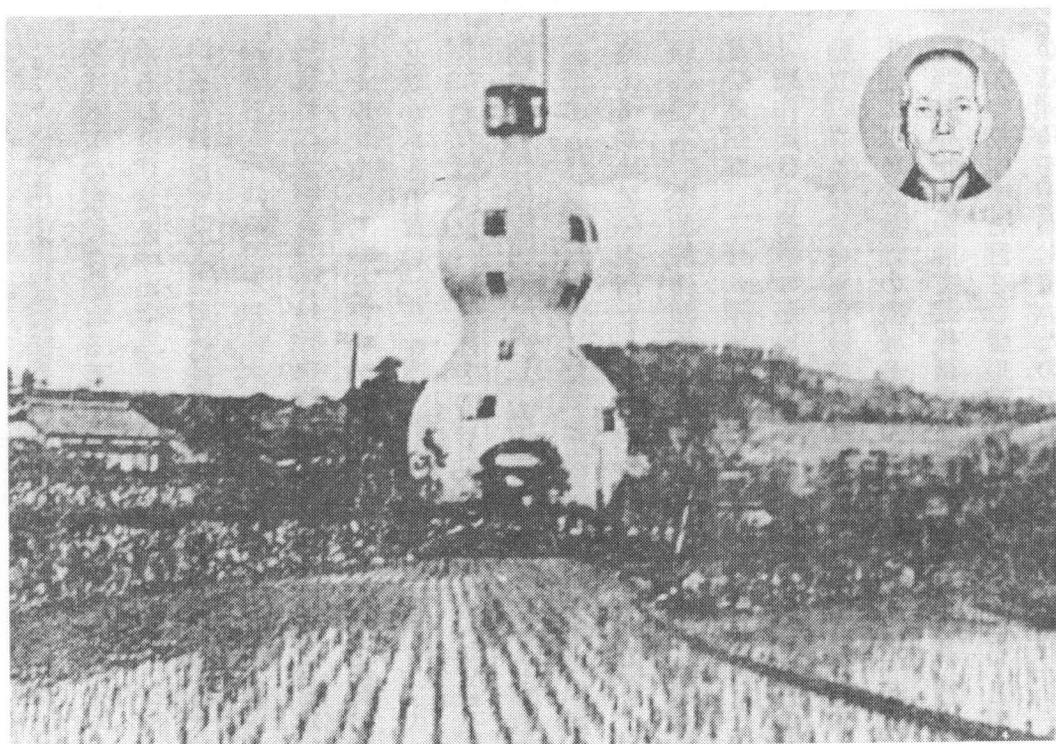
編集部

「あれは神国日本が無条件降伏・敗戦の三ヶ月ほど前、昭和二十年の五月頃だったと聞いています。軍部の人が出来て来て、有無を言わさず強制撤去、つまり取り壊したのですよ。敵の攻撃目標になるからと言って。木造七階建て、それに真っ白にペンキまで塗ってありましたからね。」

鉄輪温泉で戦前、名物だった「ひょうたん（瓢箪）温泉」の四代目を継ぐ社長、河野純一（こうの）さんの話。

大阪生まれの大阪育ち。クセのない標準語で、もの静かに語る。大阪の会社を辞めて鉄輪にやって来て九九年になる、という。

木造七階建て、高さは約一八メートル。この「ひょうたん」の形をした奇抜な建造物―それは別府湾上の船か



▲建設当時（昭和2年）の「ひょうたん」温泉

らも、日豊線の海岸をはしる汽車（当時）の車窓からも、また西大分の海岸からもよく見えた。

周囲の山並みと湯けむりによく溶け込んだ一幅の風物詩は、当時の絵ハガキにも登場した。鉄輪温泉の湯治客はもちろん、「地獄めぐり」をしてその存在を知った人もよく訪ねたものだ。

### 創業者―河野順作翁の人となり

今日、河野家に遺されている家系譜によると、その戸籍は次のとおりである。

- ・本籍 広島県御調郡野串村一七番地屋敷
- ・両親 父―嘉三郎 母―タマの長男
- ・生年月日 慶応三年 三月一日

どこの家でもそうだが、往古のことになると皆目判らない。河野家も例外ではない。

維新政府により、全国的に統一した近代的な戸籍簿が整備されたのは明治五年（一八七二）一月二十九日付け太政官発布の「壬申戸籍」からである。

周知のように、この戸籍編成は、氏名・年齢・生年月日などのほか族称（華族・士族・平民の別）から家族

（とくに戸主）の犯罪歴まで詳記するといった、およそ民主国家の根幹に触れる差別容認の悪評ふんぶん（紛々）たる制度、であった。

それはさて置き、現社長の祖父に当たる順作氏は、明治十五（一八八二）年一六歳で志を立てて大阪に出、鍛冶屋で「でっち（丁稚）奉公」をすることになった。

一口にでっち奉公といっても、若年層の人には解説が必要かもしれない。

―それは元来、封建社会のいはば徒弟奉公のこと（封建遺制）。江戸時代にあつて商工業者になろうとする者（徒弟）は、親方の家に起居して修行し、一定の年季を終えて初めて一人前として認められるというものだった。現在でも、公的職業技術教育の一制度として受け継がれている。

順作氏は、苦勞のかがあつて同二十四年、二五歳で独立。フィゴ（金属精錬のとき使う送風器）と金敷きを土間に据え、念願の機械鍛冶屋を開いたのであった。

当時、世人の間で、氏は「生来、器用な人で一種の独創力の持主」と評されていた、という。すでに、この頃から頭角を現わしていたのであろう。

矢継ぎばやに各種の新型機械を考案して売り出した。

同三十五年には、全国で初めての小型船舶用のスクリュウ・プロペラの製造会社を興した。時代は、第一次世界大戦の戦争景気で沸き、昭和の不況・不安の時代へと突き進む。昭和十(一九三五)年、当時としては破格の資本金三〇万円の「榊河野鑄工所」を設立するまでに成功したのである。

### 当時の社会的背景

明治の後半期から大正期にかけての日本は、一〇年置きの戦争に明け暮れていた。日清(明治二十七年)につづく日露(同三十七〜八)の両戦争と、大正三〜八年の第一次世界大戦がそれである。

日清・日露の戦争。『眠れる亜細亜の獅子』と恐れられていた清国に勝利するや、「三国干渉」を行なって遼東半島を清国に還付させた帝制ロシア(ロマノフ王朝)は代償としてこの地を租借し、朝鮮半島に進出しようとしていた日本と衝突する。これが他ならぬ「日露戦争」であり、この戦争を「自衛のための正義の戦」と意義づける歴史学者(元東大校長・林健太郎教授ら)は少な

くない。

この戦争で、日本は軽工業から重化学工業国へと飛躍的に発展し、資本主義の基礎が固まった。二〇世紀が始まったのは明治三十四(一九〇一)年。すでに「帝国主義」の時代に突入していた列強は、領土拡張に狂奔していた。すなわち軍事上・経済上、他国(または後進の民族)を征服して一大国家を建設しよう、というのである。のちの〈大東亜共栄圏〉の構想も、この延長線上にあったと解されている。

日清、日露の戦争後、後進の植民地は刺激されて競って民族主義に燃えて「独立」を目指し、世界の危機は深まっていった。

折しも大正三(一九一四)年六月、オーストリアの皇太子がセルビアの一青年に暗殺されるや、一気に爆発し、世界は二大陣営に分かれて戦火を交えた。当時、日本は現在のように不景気にあえぎ、武力による海外市場の獲得でこれを解決しようとしていた。日英同盟を結んでい

たこともあり、英米の連合国側に加担し、ドイツ・オーストリアと戦った。

ドイツの租借地たる南洋諸島と青島(中国山東省)を

占領。欧米諸国がヨーロッパに勢力を集中している間に、日本は中国大陸の利権拡張にのり出した。連合国側が勝利に終わった第一次戦争でも、日本の工業生産（とくに重化学工業）はさらに飛躍的な増大をみた。

その後、戦争による好景気にもかかわらず、国内の市場は少しも開拓されることなく、不安な世相がつづく。

生活苦・就職難に加えて大正七年の「米騒動」は、全国の「カアちゃんパワーの爆発」で「民衆の一大蜂起事件」となった。日本資本主義は著しい発展を遂げた半面、その矛盾もまた深刻なものがあつた。

つづいて「関東大震災」がこれに追い討ちをかけた。

・発生日月

大正十二年九月一日午前十一時五十八分

マグニチュード七・九ないし八・二

・全壊家屋 一二万八二六六戸

半壊 〃 一二万六二二三三戸

焼失 〃 四四万七二二八戸

・死者総数 九万七二二八名

行方不明者 四万三四七六名

負傷者 一〇万三七三三三名

・損害総額 六五億円（当時・推計）

関東地区の一大工業地帯は全滅。横浜地区の重工業の工場群はもちろん、東京市内下町の零細工場（主に軽工業）も消滅し、機械施設への打撃も甚大であつた。これが復興に各企業は生産に追われたのであつた。

### 鉄輪に湯治にきて

鉄輪温泉との、そもその機縁は――。

大正後期、順作翁は、難病で不治といわれる関節炎の治療にやって来ていて、鉄輪が気に入つた。その後、妻のマツさんもまた難病のリウマチを患つたことから、夫婦して別府への転居を考えるようになったらしい。

目を着けたのが鉄輪温泉の東域（大字鉄輪字フロモト）と、大字境を流れる八川の南隣接地（大字鶴見字北中・同八川）の一带であつた。居宅を建てるや、直ちに温泉源の用地を探した。幸運にも、大量の高熱源泉を掘り当てた。自噴しないため、横穴のトンネル（隧道）を穿つて引湯した。地元から「他所からやって来て、一発で温泉を掘り当てた運の好いヤツ」とねたまれた。別府温泉に他所からやって来た事業成功者を評するとき聞かれる、

いわゆる「赤猫根性」の類である。

当時の鉄輪温泉は、俗に「地獄(噴気・沸騰泉)の巢」と呼ばれていたほど湯量は豊富だった。炊事場のカマドでは薪を使わず、噴気を取り入れて煮炊きができた(地元では「地獄ムシ」といった)。入浴には不自由なかった半面、困ったのは生活用水の不足であった。この点、旧別府市内の流川・楠温泉・旧棧橋界限に住む住人と同様であった。

### 一大温泉保養ランドの建設が夢

大正も後期、待望の購入地に居を構えた老夫婦は、次つぎにアイデアを活かして温泉施設を造作してゆく。それが唯一の生き甲斐で「夢」でもあったようだ。

八川の渓流を巧みに利用し、谷の岩石をふんだんに使って野趣に富んだ施設を作ろう、と…。

それは、かつての徳川中期から幕末(元和年間(天保年間)、鶴見郷(原中村と北中村)を支配した豊後森藩・久留島侯が飛び地の小倉、照湯温泉に設けた「殿様湯」(別名「御前湯」)の諸施設を彷彿とさせるものであった

(ちなみに鉄輪地区は、別府と並んで日田布政所が支配す

る「天領」であった)。史料(『鶴見七湯の記』)によれば、次のような諸施設が設けられていた、と記されている。

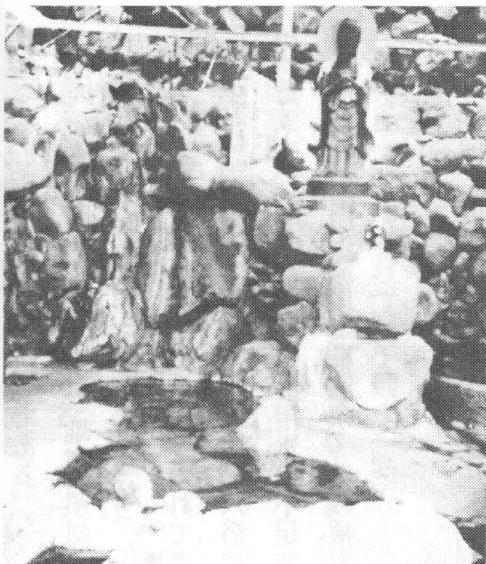
一の湯 二の湯 三の湯 飛泉の湯(滝湯) 砂湯  
蒸し湯 築山 庭園 茶屋 曲輪(遊郭街) など

老夫婦に果たして、このような歴史的知識があったかどうか、それは分からない。

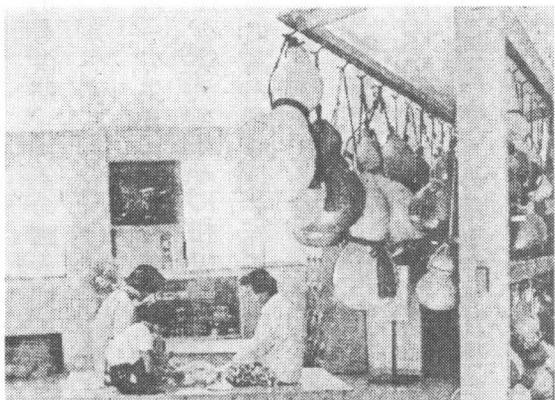
しかし元来、好奇心が旺盛で人一倍、未知の事象に関心が強く、挑戦して止まない情熱と実行力の持ち主であっただけに、鉄輪温泉場から西方山手約一キロ余の照湯温泉まで歩を運び、史跡をつぶさに見聞した上で、ひたすら構想を練ったのではあるまいか。

次つぎに設けていった施設とは、まず「ひょうたん」型の大小浴場。それに高所から落下する熱湯も、コンクリート製のひょうたんの口先からほとぼり出るといふ凝り様であった。また、八川の渓流を利用した滝湯、砂湯、蒸し湯。加えて、川岸から橋を架けて掘った横穴のトンネルの奥深くには、天井の明りで入浴が楽しめる「極楽湯」も作った。

子供向けには、滑り台のついた「温泉プール」。五月

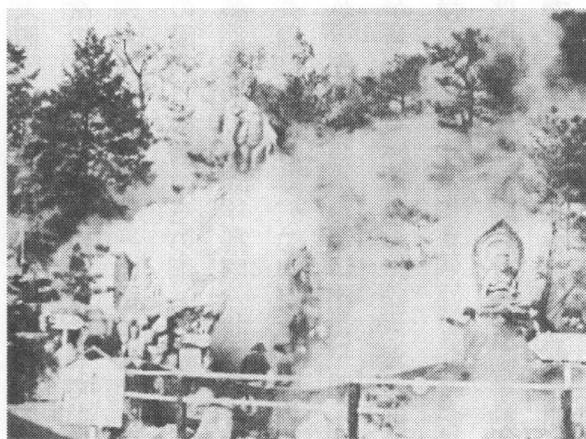


▲最初に造られた浴槽（ひょうたん湯）

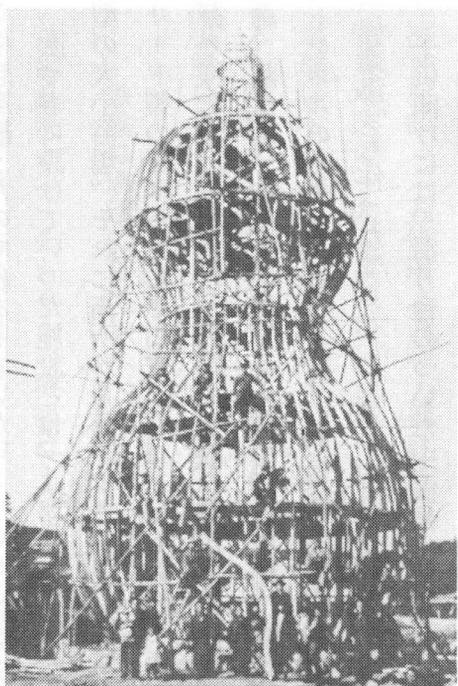


▲「ひょうたん」売場（当時）

（写真はいずれも「ひょうたん温泉」提供）



▲昭和8年当時の金龍園（地獄）



▲ひょうたん家の上棟式

時分には藤棚の下で花見のできる「藤の湯」。園内に設けた食堂と、その隣には当時珍しい「玉突き台」（現在のビリヤード）と「ピンポン台」を置いた休憩所の併設も忘れなかった。

以上のように温泉をふんだんに使った一大保養ランドを、順作翁は自ら「養老園」と命名した。文字どおり、楽しく余生を生きる “温泉の桃源郷”（陶淵明<sup>とうえんめい</sup> 中国人）をこの世に実現しようとする趣旨である。

幕末生まれの翁には、その昔の「養老の滝」の故事が、併せて頭に浮かんだのではあるまいか。

その故事とは「元正天皇の御代（七一四〜七二四年）、親孝行の樵夫<sup>せうり</sup>が病に効くという、滝の霊泉を汲んで飲ませていた。至誠天に通じたのか、滝の神（竜神）はひょうたんの水を酒に変えてやり、目出たく病気が快癒したという説話である。この滝は今もって岐阜県養老郡養老川の上流に在り、今日「観光名所」として訪れる人が絶えない、とか。

最盛期を迎えて園内が狭くなると、北中八川所在の隣接農地を買収（二一八坪）し、ここに二階建ての入湯旅館二棟を築造し、格安で湯治客を泊めて便宜を図った。

こうした事などから、鉄輪温泉地元の旅館・貸間（当時は十数軒）や組合、また北中組が経営する有料部落温泉（但し、地元住民のみ入浴料は無料）「谷の湯」（前掲「鶴見七湯」の一つ）管理者との間で悶着<sup>もんぢやく</sup>が起きたほどである。原因は、ひょうたん温泉側が、ポランティア精神から無料もしくは格安で施設を開放し、客を奪われたからであった。

両者の間での交渉でも、地元村会議員でも解決せず、最終的には村長が仲に入って、どうやら「有料」（と適正な価格）にすることで一件落着をみた。翁の「社会のため、地域のために奉仕したい」と明治人（実は幕末生れ）ならではの奉仕の心意気と気骨が感じられる話である。「言うは易く、行は難し」で、死ぬ前にも地元神社に千数百坪の土地を献納している（後述）。

#### 「ひょうたん（瓢箪）温泉」命名の謂われ

翁は何故に、これほどまでして「ひょうたん」にこだわったのであろうか。前掲の社長は、淡々として次のように語った。

「祖父は、ハダカ（裸）一貫で天下を取った太閤秀

吉びいき、というより深く崇敬していたようです。我が身の姿とダブラせて……。そこで秀吉の「千成せんなりびょうたん」にあやかり、これを園のトレード・マークにしようとしたのではないのでしょうか。」

この「千成（千生なりとも書く）びょうたん」は果実こそ小さいが、多く群れて生えるので縁起がよく、目出度いものとされていた。

宇佐地方の農家では庭先に昔から栽培しており、実が熟すると中のワタを繰り出し乾かして磨きをかけると、大小様々の形のもので採れた。もちろん、宇佐八幡の参拝記念に縁起物としてよく売れた。翁は園内の土産品店に飾り並べ、宣伝にも利用した。商魂たくましいド根性も見逃せない。（写真参照）

### 「金龍園」（地獄）をつくる

翁は、これくらいでは満足しなかった。

昭和七年一月には、白池地獄とは道一つへだてた反対側の地（鉄輪字向ヶ原三二一番地四八四坪）の土地と鉦泉地（一坪）を購入し、今回もまた、めでたく地獄を掘り当てたのであった。

この地獄には仏像を作り、衆生しゅじょうせいじ済度を願って熱湯の池の中に金色の龍を置き、その口から噴気を出して地獄の亡者たちを救出しようとしている形のもの、を企画した。名称も旧来の「○○地獄」とせず、単に「金龍園」と命名した。

この金龍園の仏像建立には、当時腕のよいことで評判の仏師・水野信山しんざんに依頼した。阿弥陀如来と脇侍の三体を破格の七百円、十二支の守り本尊の仏像は一体を三五円で請け負わせた。

水野仏師は毎朝、仏に拝跪はいくま三拝の礼を尽し齋戒さいかい沐浴して製作に励んだ、という。翁は、己の意図した形でみごと完成した仏像群の建立に、しのび寄る歳並みと仏の慈悲にすがっての成仏を念じ、併せて終生の事業のモニュメント（記念碑）にしようと思ったのではあるまいか（筆者には、そう思えてならない）。

### 建造物の「ひょうたん」にも挑む

翁はこれ以前、とてつもない奇妙キテレッツ（奇天烈は当て字、語源不明）なアイデアが浮かんでいた。建物の「ひょうたん」に挑戦しよう、というのである。

木造七階建、建物の高さは約一八メートル。建物のてっぺん（天辺）、つまり縦に立てたひょうたんの口先の回りに東は別府湾から、西は山並みまで四方を見渡せる「展望台」を布設しようという案であった。

当初、このような企画を聞いて驚いたのが、工事を依頼された設計士と大工の棟梁とうりょう。そんな設計も建築もした者は全国にいない。とりわけ棟梁は、それに必要な資材（中腹に必要な曲がりくねった板用材）が入手可能かどうか、不安にかられたらしい。承諾するものがおるはずもなく、挙句あげくの果ては「気の触れた変な爺さん」「変わり者の変テコ（挺）リン」と愚弄ぐろうされる始末であった。それ以上に当惑したのが、当時、町から「市」（別府市に、大正十三年）に昇格したばかりの市役所建築課の面々、「このような特殊建造物の建築許可を出してよいものかどうか」と思案投げ首。容易に許可が下りなかつたといわれる。

やっと説得した結果、「台風にも倒壊しないような頑がまとした物を作れ」。その上で、てっぺんから四方にロープ（鋼鉄製）を張りめぐらすように、との厳しい条件付きであったという。

建設完工は昭和二年春。この奇抜な建物（写真参照）は爾来、終戦時までの十八年間、再三の大暴風雨にも倒れることなく、意地を貫ぬいて（？）翁の期待にこたえた（当初は周囲に家屋がなく田んぼの中に突っ立っていたため、別府湾からの台風は強かったと思われる）。

### 立ってしまえば「コロンプスの卵」

建物が出来上がってしまえば、何の事はない。これこそ「コロンプスの卵」というものだろう。これには、若干の解説が必要かもしれない。

コロンプス—イタリア半島（長靴のような形）のほぼ中央部地中海に面した港町、ジェノバの出身。冒険航海士（一四四六—一五〇六年）。港近くの生家は石造りで現存しており、いま観光客の名所になっている。

アメリカ新大陸の発見で、一躍世界に有名になった彼のために祝賀会が開かれた折のことである。

「こんな程度のことは誰でも出来る」と評されるや、彼はやおら卓上の卵を取り上げ「諸君、この卵を立ててみよ」。誰もできないと知るや、卵の尻を少しつぶして立ててみせた。すなわち、誰にでも可能なことを敢えて

最初に試みることに至難さを「卵」に託して説いたエピソードである。

\* \* \*

順作翁が亡くなられたのは、戦後昭和二十五（一九五〇）年十二月八日。この日は、奇しくも第二次大戦の開戦日、その夜のことであった。

居宅内に設けた家族湯から、いつものように上がってこないことに不安を感じたお手伝いさん（妻マツさんはすでに他界）が、ぐったりしている翁に気付いた。心臓麻痺の発作であった。こうして翁の波乱万丈の人生はついに終わった。

### 翁の「頌徳碑」のこと

翁は戦争最中の昭和十六年七月二十八日、七五歳を迎えた記念にと、鉄輪温泉北西部に位置する小高い丘に祀る温泉神社（当時）の境内に、続き地一二八六坪を購入して献納している。

敗戦の混乱もほぼ収まった同二十五年二月十五日の吉日、その寄付行為に感謝した地元民有志が同社参道入口に翁の「頌徳碑」を建立した。その除幕式には、もちろん

翁も招待されている（写真参照）。

建立された自然石には、次のような碑文が刻まれている。

### 鉄輪瓢箪温泉経営主

#### 河野順作翁之碑

篤志によって昭和十六年七月二十八日

鉄輪発展のため 別府市鉄輪大字鉄輪字山ノ上

五八五番地外五筆 総面積四反二畝二六歩 及

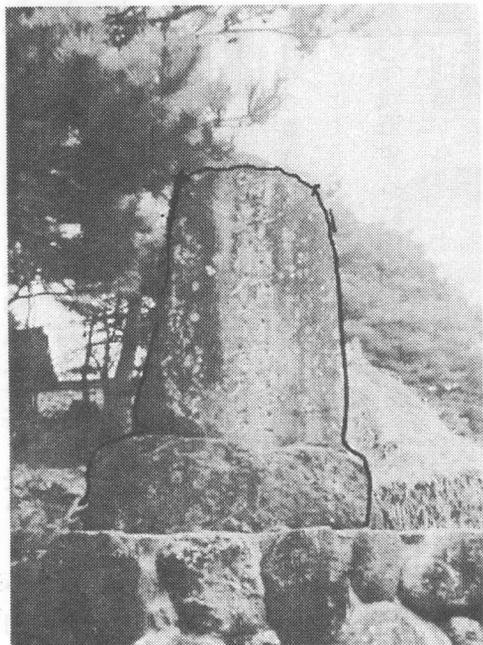
噴気一口を温泉神社に寄付された記念とする

昭和二十五年二月十五日

#### 温泉神社

翁はこの年、四月になって陽気になると、待ちかねたように上阪した。若き日の人生舞台であった工場の地を訪ね、父や先立った子の墓に詣でた。折から開催中のアメリカ博覧会を見物し、一週間後に鉄輪に帰った。旅行好きの翁の最後の旅であった。逝去は、その半年後のことであった。

幕末の動乱の年、慶応三年に生まれ、明治―大正―昭



▲河野順作の頌徳碑



▲河野順作翁 (1867-1950)

和の波濤を生き抜き、昭和二十五年十二月に天寿を完うしたのである。

養老園主人 河野順作翁は行年八四歳

法名は「随光院釈宏信士」

今は、大阪市の阿倍野の墓地で父嘉三郎と先に死去した長男(清三)の墓石との間で、糟糠そうこうの妻マツとともに静かに永遠の眠りについている。

### ―後記―

速見の湯が「別府温泉」(別府八湯)へ飛躍的に伸びようとしていた明治後半期から大正期、この大温泉地に夢を抱き「一旗ひとぼた上げよう」と、県内外から事業家が流れ込んだ。そして成功した人は、さほど多くはない。

成功者で別府温泉に大きな足跡を遺した人の筆頭は、何といっても「油屋熊八翁」を置いて他にあるまい(四国宇和島出身)。油屋翁は、やる事がずば抜けて派手で、またスケールも大きかった。

「翁を偲ぶ会」(会員約三二〇名)では毎年春、記念行事を催して彼の遺徳を偲び、追悼している。

その影にかくれて河野順作翁の業績は、さほど目立た

ない。活躍した舞台も鉄輪温泉一帯と狭いこと、加えて何より残念なのは、名物の「ひょうたん」の建物が軍部により取り壊されたことだ。「あの建物さえ、今あったらナア」と嘆く人が少なくない。それも予想だにできなかった「戦争」（しかも敗戦）という運命のいたずらであつたのだろうか。

\* \* \*

本稿を執筆するに際して、現在、ひょうたん温泉・金龍園（地獄）を経営する会社（株式会社・ユーマネット）社長、河野純一氏より聴取した内容を極力正確を期して記述したつもりである。

今一つは七年ほど前、大分合同新聞社が創立二一〇周年に記念出版した『大分県歴史人物辞典』（平成八年八月二十日刊）で取り上げた人物（県下各界で一八六〇名、別府市の関係者は百人余り）の中に「河野順作氏」の名も挙っていた。

その取材に当たり、遺族から戴いていた翁の一代記『養老園主人』（河野幸男著 昭和五十五年十二月刊）も参照させて戴いた。幸男氏は現社長のご尊父、とのことである（他界）。この文中に、地元の村会議員として私

の祖父の名前が出ており、養老園の最盛期に農地約一反を購入して旅館を建てたとあり、その農地も当家のものであった。今、このようにして河野家の事業に関連があつたのも、（神）仏を尊崇していた翁との「仏縁」を感じない訳にはいかない。今日の「ひょうたん温泉」も全国的な温泉ブームにのって繁栄しており、温泉場入口（駐車場）の一角には、鉄輪湯けむり俳句の「句碑」も建てられ、奥の隅にはひょうたんの棚に果実がぶら下がって入湯客を迎えている。ご一家の更なる繁栄を祈ってやまない。なお、文責は一切私（編集部 大野）にあります。

旅の思い出が詰まった絵葉書



地域おこしグループ「愛酎会」

鉄輪よんだ句 全国に